

JSPS Project アウトバウンド海外施設訪問(上海)

日時： 平成 29 年 1 月 9 日（月）～平成 29 年 1 月 11 日（水）

場所： 中国、上海、(復旦大学 中山病院、上海交通大学 第一人民病院)



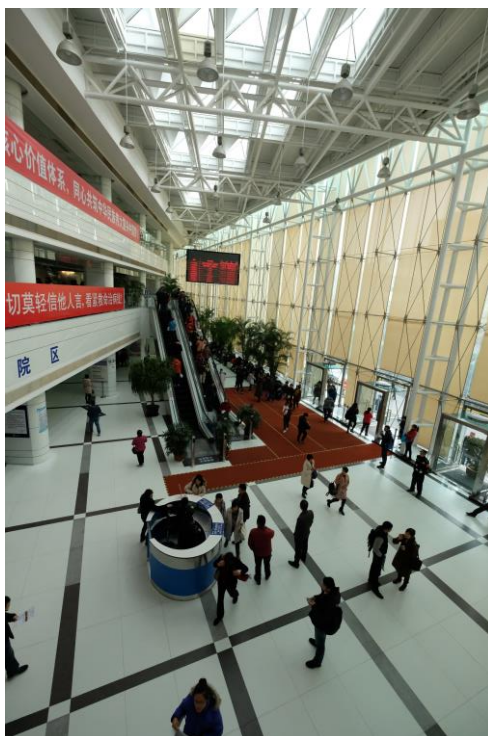
(左) 中山病院：訪問を歓迎する看板



(右) 内視鏡センター入口の様子

2 日間にわたり上海にある拠点病院（復旦大学 中山病院、上海交通大学 第一人民病院）の見学を行った。事前調整を行っていたため、訪問は非常にスムーズに執り行われた。中国は内視鏡室に麻酔科医が常勤しており通常から治療内視鏡まできちんと麻酔管理がなされ、内視鏡医は手技に集中できる環境と安全管理という点で非常に整備されている印象だった。一方でスペースの問題から待合やリカバリーなどのプライバシーがあまり確保されていない印象であった。総人口が多いため、大病院の患者さん待ち、入院待ちは日本の比ではなかった。

(左) 病院入口 (右上) タッチパネル式患者説明文書 (右下) 専門外来待合室



「復旦大学 中山病院」

中山病院では内視鏡治療部センター長を始め 3 人の教授より歓待をうけ、お互いに自己紹介を行った。粘膜下腫瘍の切除における世界的権威者である Prof Zhou Pinghong より講義、当院スタッフから粘膜下腫瘍の診断、食道運動異常症に対する HRM を用いた診断法についての講義が行われ多数のスタッフが出席した。双方に質問や充実した議論が行われた。また今後の医療交流の在り方や方針について話しあった。Prof Zhou は来年の内視鏡学会総会で TEMDEC との内視鏡ライブの遠隔中継接続を予定しているため、富松は別行動で病院技師と綿密な打ち合わせと人的交流を実施した。午前午後の間には Dr Zhu の好意により病院内の外来部門を中心に他の部署の見学を行った。麻生より国際診療センター、富松より遠隔医療室の視察を希望した。国際診療センターでは中国では珍しい 2 人部屋か個室で食事内容も一般病棟と差別化され、スタッフは最低英語が話せるものに限定されていた。遠隔医療室は中国国内の病院間の有料セカンドオピニオンに活用され、使用には病院許可と使用料が必要であることが説明された。今後の日本との遠隔医療や遠隔相談の発展に向けた興味深い現状把握が可能であった。午後は新しい内視鏡治療センターでの実技の見学に従事した。我々の訪問に合わせてかなりのバリエーションの治療手技が用意されており、夕方まで休みなく手技見学が行われた。中国国内、世界でもトップレベルのハイボリュームセンターであり、内視鏡検査は年間 11 万件と日本とは比べ物にならないスケールを誇っていた。



(左上) 中山病院：対談の様子

(右上) 遠隔会議室で説明を受ける訪問団

(左下) 遠隔会議室

(右下) (院内クリニック) 国際診療センター

「上海交通大学 第一人民病院(北院・南院)」

午前中は北院にて、ProfWan を中心とした内視鏡センターの案内を受けた。内視鏡検査はそれぞれの南北院にて 2~3 万件とボリューム的には見劣りしたが、南院は 2020 年に新病院の開設を予定しており今後の発展が見込める施設であった。午後の南院については医療教育プログラムに従事している ProfWan より内視鏡トレーニングセンターの説明、見学に案内され、中国での内視鏡医教育の現状を知る貴重な機会を得た。中国オリンパスの出資で開設された院内トレーニングセンターを活用してワークショップを 3 か月ごとに中国全土から募集して ESD などのトレーニングが実施されていた。午前午後それぞれの施設で当院スタッフから粘膜下腫瘍の診断、食道運動異常症に対する HRM 診断、早期胃癌の発見法についての講義が実施され、熱い議論がなされた。南院については、学生寮や図書館など医科大学と研究施設が一体化しており、近隣も外国大学などが誘致されて学園都市を形成しており、研究活動集中する環境が整えられていた。



(左) 講義の様子



(右) 内視鏡トレーニングセンターの様子

「まとめ」

患者数、検査数、スタッフ数、研究費、設備投資は日本を圧倒、内視鏡設備は同等の状況で、近年の中国のすさまじい医療水準の上昇を現地にて肌で感じる事が可能であった。また日本と中国の保険診療、ガイドライン、適応の違いを双方で話しあうと同時に、量質転換の現実を垣間見ることができた。先方からの自分たちの病院にはアジアのみならずヨーロッパ、北米からも研修にやってくる、日本で1年間研修しないとできない手技は当院では1週間で身に着けることができるのに、なぜ日本人は中国に研修にこないのだという質問が本質であると感じた。現場へ出向くことで、日本が見習うべき点、と同時に変えなくてもよい

点を確認することが可能であった。具体的には日本独自の職人気質の丁稚奉公的な診断や治療の技術習得の課程は、中国とは別のアプローチでの質の担保がなされており決して否定されるものではないと感じることができた。

立地、人口を考えると、中国は韓国の次にアジア最大のハイボリュームセンターとして今後多くのエビデンスを発信していくポテンシャルを有している。日本は厳しい制約の中で、医療の国際化をより実践的かつ効率的に取り組み、国際間の競争に勝てるような中国とは異なる独自の魅力ある病院ブランディングが必要であると感じた。同時に新たな取り組みに向けてのより実践的なヒントをたくさんいただいた。

最後に清水先生がこれまで招聘された先生方を中心に中国（ゲスト側）準備のすばらしさに感動しました。参加させて頂きありがとうございます。

文責 国際医療部 麻生